

をのべて支那の氣候の大綱みな概念を興へる方が望ましい。この意味で本篇が氣候の概要を示すに止まるとはいへ、それは此かもこの價值を失はしむるものではない。この篇中の記述が常に日本との比較に於て述べられてゐることは我々の理解を容易ならしめ、歴史や産業への關係が加味されてゐることは讀者の興味を増さしめる。

第三篇は支那の土壤、多田文男氏の撰、第四篇は支那の生物、第五篇は支那の諸民族、いづれも鹿野忠雄氏の撰、第五篇は人種學的な記述、第六篇は揚子江河川誌、第七篇は東支那海海洋誌、共に吉村信吉氏の撰、第八篇は支那の礦物資源、坪谷幸六氏の撰、これによつて本書を終つてゐる。第六篇が古來、中部支那の交通に大きな役割を演じ來り、更に今後の東亞の新秩序に益々任務の重大なる揚子江の河川誌に費され、第七篇が今後益々緊密を加へるであらう日支交通の舞臺である東支那海に費され居ることは誠に時宜に適したものと云へよう。第八篇に礦物資源の項の加へられてゐることも意義深きを覺える。とにかく全卷一つとして有益ならざるはない。

しかし假に妄評が許されるならば今すこし本書の頁の配分に意が注がれてもよきはなかつたらうか。全頁の大半を地形が占むるは止むを得ないとしても、支那の土壤に僅か二〇頁を費すに反して、支那の生物に六十頁近くを費し、氣候の六十頁餘を費すとほぼ同量の頁が占められてゐることは稍、當を失したるかの觀がなげでもない。又本書の或部分には單なる事實の羅列に終るものが

見うけられないでもない。これは自然地理的な記述として止むを得ないとは言へ、今すこし意識の濃厚さが欲しかった。しかしともかくも文科に於て地理を學んだ自分が自然科学者にかく求めるのは或は無理かも知れぬ。

とにかく、本書の全卷に盛られるところが悉くその道の専門家の述作であり、言々、東亞新秩序に示唆を興へないものとはない。本書が執筆に各々その人を得てゐることは、本書の價值をいやが上にも高からしむるもの、自分はこれに對して萬辭の讚辭を送つて惜まない。

本大系はこの自然環境篇の外に他篇が続いて刊行されるといふ。尙ほ一層本大系が興望に叶ふ傑努力されんことを祈り、妄評のお詫に代へる。

(菊判四八九頁、日本評論社發行、定價五圓) (柴田孝夫)

## 回教圈要圖

### 回教圈研究所編

人口の地理的分布と密度とを、交通網其の他の人文的諸條件と共に記入して、直觀に懇へる地圖の如きは、地政學的諸考察に於て特に裨益する所多大である。今日喧しく論じられる回教徒の、世界に於ける地理的分布圖、所謂回教圈地圖は、從來、歐米に於ても概ね附屬的なものに止まり、獨立せる大地圖の作製は、至難の業として着手せられて居なかつた。善隣協育の經營する回教圈研究所は、今回、所員の努力によりこれが達成を企圖し、茲に一

應の完成を見ると共に、これが頒布を行つたのである。以てその勞を多しなければならない。

先づ編者の意圖を見るに、言ふまでもなく回教圏の重大性を強調することに在ると思はれる。現下、我が國が世界史的使命として、その創造に邁進しつゝある大東亞共榮圏が、まさに世界回教徒の三分の一を構成してゐる一億の諸民族を、其の中に包括する事實に鑑み、先づ「回教圏要圖」を作製し、右の二大圏の重り合を如實に描寫して、回教徒問題の火急性を提唱すると共に、世界の三大陸に互る回教圏の、密接な相互關聯性を示唆しようと企圖したものである。

さて、縮尺を一千萬分の一に選んだ亞歐大陸を中心とし、縮尺二千萬分の一のアフリカを加へて、一面の地圖にまとめた此の要圖は、縦一〇三種、横一五二種の大地圖となつた。圖の上半部、東はカムチャツカ及び日本列島に始まり、亞細亞の北部を経て歐洲大西洋岸に至る一帯の地は、黄色一いろに染められて居る。これは回教徒の非居住地帯、乃至はこれに準ずる地帯である。これと同じ黄色の土地は、フィリッピン、佛印、タイ、ビルマから西康・西藏に及び一帯、並にアフリカ南半を占めて居る。

回教徒の居住地、即ち所謂回教圏は、支那沿海に始まり中央アジアを經、アラビヤ、トルコを掩ひ、バルカン諸國及びアフリカ北半に互る大地域を占め、圖上に於ては緑色の美事を描く。緑は回教徒の聖色として尊ぶ色である爲、回教圏の着色にこれを使用したといふ。そして、各地域の總人口に對する回徒

教數の比率をば、緑色の濃淡を以て表現し密度圖として居る。この濃淡によつて、各地域の人口構成に於ける回教徒勢力の強弱を察知し得るわけである。更に回教徒の絶對數は、一億十萬人の赤丸を以て表示せられて居り、大體の密度と人口數、及びその中心的居住地が一目瞭然、了解し得る仕組である。尤も誤もないわけではなく、英領ソマリランドは印刷の誤により二五・一五〇%の着色になつて居るが、實際の密度は七五・一〇%の色であるべく、またエチオピアの實數を表示する赤丸は少きに失して居る。體裁に於てもその名の如く要圖の域をせず、鮮麗といふ程の美事さはないとしても、表裝して壁間に掛け、或は机上に展開し、更に別冊附録の解説及び地名索引を利用することにより、回教圏の研究に便し、或は世界情勢の遠觀に際して、誠に好資料を提供せられたものと言はねばならぬ。

今や西南アジアに對するソ聯の南下、印度並に支那の赤化に深甚の憂慮を懷く吾人にして、亞細亞の中帯を東西に貫き、ソ聯の赤化工作に一大障礙を築いて居る回教徒の存在に對し、更にまた、南洋殊にジャヴァを赤丸で塗潰して居る四千萬回教徒の存在に對し、無心にこれを看過し得る者、果して幾人かあらう。假にまた世人の關心が薄いとすれば、本圖の存在意義は更に倍加するとも言ひ得よう。大經倫家たる秀吉が、扇面に日本、朝鮮、支那を含む東亞地圖を描かしめ、背面には支那語の譯を記して愛用したことは有名である。秀吉を継ぎ出さずとも、今日、常に念頭から地圖を離さず、大局的に世界情勢の推移を遠觀し、變轉の機微を

掌握することは現下特に緊要なるを思ふ。敢て阿教圈要圖を茲に紹介する所以である。

(平凡社發賣、解説並に索引附、定價七圓)(三上正利)

佛領印度支那——政治・經濟

太平洋協會編

皇軍は大陸に駒を進めて既に三年有餘の歲月を閲してゐるが、皇戰その終る處を知らない。それは我日本の使命とする大東亞共榮圈確立を目指す我軍民一致の努力であるが、此が皇戰の意義を解しないもの、一つに援將佛領印度支那がある。一方歐洲に於ては佛蘭西は獨逸に屈從する事になつた結果、佛蘭西は其極東植民地支配能力を缺如するに至り、多數の佛領植民地の歸屬は重要な問題となつた時に、皇軍は援將監視隊の名の下に佛領印度支那に進駐する事となつた。そして今日更に此等南方問題の重要性は認識せられて此が對策は愛國の識者の間に論せられるに至つた。

此時に當り、太平洋協會に於ては「佛領印度支那の産業・經濟・政治の調査を以て極めて緊要なりと認め、銳意この研究に當り、」茲にその成果が公刊された事は誠に時宜を得た事と云はねばならぬ。

本書は五編より成つて居り、豊富にして且周到なる資料を以て記述せられてゐる。即ち第一編統治に於ては佛蘭西の佛印に對する植民政策の變遷を述べて、其批判が爲されてゐる。佛蘭西がアフリカに對して成功した、その傳統的植民政策とも云ふべき同化

主義政策は佛印への適用に於て失敗したと論じてゐる。現在に於ける統治は此を英國の印度、和蘭の東印度のそれに比すれば尙多分に干渉的且專制的にして、原住種族の政治的自由は著しく制限され、その取締は苛酷であるとしてゐる。第二編農業に關しては、佛印に於ける重要な産業は農業と鑛業とである。就中農業は現在に於ても其社會的基礎を爲してゐる。土人の傳統的米作農業に對抗して、歐人の近代的プランテーションが發展してゐる事を土地所有關係、經營、小作人、勞働者等に就て詳論し、第三編交通に於ては、一般的には交通機關は發達してゐるとは云はれないが、此が整備は各國行政の統一であり、國內開發、更に國防的見地から觀て重大なる問題であるから歴代總督は交通施設の擴充には連續的努力を拂ひ來つた事を述べてゐる。就中援將ルートとして世界の視聽を集めつゝある雲南鐵道はデューメル總督の時に佛蘭西の西南支那へ勢力伸張の目的で計畫されたものである。第四編佛印の貿易は、是を總る佛支、日の三者の關係を考察することに依つて始めて日本貿易の上に佛印の占める地位の重要性を理解し得ると共に、東亞經濟圈の確立に當つて、我々が佛印の經濟に對して將來如何なる關心を拂ふべきか理解することが出来るであらうと論じて、貿易一般、關稅制度に關して述べてゐる。第五編佛印に於ける華僑は總人口に對し、僅か一・四％に過ぎない。彼等は大部分が商人であつて、特殊の商才を持つてゐて、原住種族の經濟の基礎たる米の商業は古來彼等の獨占する處で、土人の上に占むる彼等の勢力は強く、又財政金融上にも大なる地位を占めるが故